＜枕草子＞
ふと心劣りとかするものは、男も女も、言葉の文字いやしう使ひたるこそ、万づのことよりまさりて、わろけれ。

ただ文字一つに、あやしう、あてにもいやしうもなるは、いかなるにかあらむ。

さるは、かふ思ふ人、殊にすぐれてもあらじかし。

いづれを、「善し」「悪し」と知るにかは。

されど、人をば知らじ、ただ、心ちに、さおぼゆるなり。